

Mathematical Sciences News

2022-1
vol.48
2022.10.1



数理 News 2022-1

<https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/publication/surinews.html>

編集：

東京大学大学院数理科学研究科
広報委員会

冒頭言

大学院数理科学研究科長
斎藤毅

研究ニュース

落合卓四郎
山本昌宏
小林俊行

新任紹介 Topics

人事ニュース



活動再開?!

大学院数理科学研究科研究科長 斎藤 毅

2年ぶりの海外出張に行ってきました。フランスのマルセイユ郊外にある滞在型の研究所 CIRM(Centre International Rencontre Mathématique) で数論幾何のサマースクールでした。CIRM は数学国際交流センターとでも訳せばよいのでしょうか。前回の海外出張は2年前の3月で、滞在を途中で打ち切ってイギリスから逃げるように帰って来たので、今回、現地で参加するかどうかはだいぶ迷ったのですが、思い切って行ってきました。フランスでは国内線の飛行機やバスなどでもマスクをしている人はほとんど見あたらず、特別な対策はもうなくなっているようでしたが、コロナ禍が終わったわけではないので、サマースクールはハイブリッドでした。フランスーアジアという看板どおり、日本からも現地で16人参加しましたが、中国からの参加は残念ながら全てオンラインでした。そうは言っても、大勢の中国人留学生が現地で参加し、フランスーアジアという名前にふさわしいものになったと思います。上の写真を撮った人も中国人留学生です。

サマースクールということで、3コマの連続講義をしました。やはり対面の講義はライブ感が違います。参加者の表情を見ながらどうしゃべるかを考えたり、準備していなかったことを質問されてとんでもない答えをしてしまったり、休み時間にもっと突っ込んだ説明を個人的にしたり、講義の感想を聞いたり話したりと、こういうことがコロナ禍以前は当たり前でできていたんだと思うと失っていたものの大きさに涙が出てしまいます。数学をするということの中で、目の前にいる人に自分が考えてきたことを伝える喜び

のもつ意味を改めて感じました。

小道具の話もしましょうか。数年前から、海外に行くときはたいていチョーク1箱と黒板消しをもって行って、輸出促進に努めています。羽衣チョークの技術は海外で継承されているのですが、やはり国産チョークの書き味は違います。黒板消しクリーナーは電圧の問題があるので持っていけず、休み時間に外の壁でバタパタしていると、小学生の頃を思い出します。

CIRM の魅力には環境の良さもあります。カラंक(石灰岩の入江)国立公園の入り口にあり、1時間弱降りていくと水はちょっと冷たいですが地中海で泳げます。素潜りでも魚の群れが見られます。研究所の近くでも、子連れのイノシシが出没します。水曜日の午後は港町カシまで恒例の遠足です。海や絶壁を眺めながら岩場の登り降りも含めて6時間ぐらいという本格的なもので、毎回楽しみにしています。その間も数学の話が続けている人もいますが、そこまでなくても、遠足でできた繋がりがいつか研究に生きてくることもあるかも、ぐらいに思っていればいいでしょう。食堂で、旧い知り合いから初めて会う学生まで、いろんな人と話しながら食事するのも、感染拡大の不安感がありますが、貴重な時間です。

コロナ禍でセミナーや研究集会がほとんどオンラインになってしまっていました。日本から参加しようと思うと時差による難しさがあります。コロナ禍以前から、海外の研究集会などでの日本人の存在感の希薄さが気にかかっていたのですが、ヨーロッパなどでは研究集会などがこのように再開されているのを実際に

見てくると、焦りのようなものを感じてしまいます。

そうは言っても、活動再開にはリスクもあります。このサマースクールでも、期間中に陽性が判明した参加者が1名おりました。帰国便搭乗前72時間以内に受けたPCR検査の陰性証明書が必要なので、マルセイユ市内の検査所訪問という日本からの参加者限定オプションツアーもありました。これの準備では、フランス側のオーガナイザーにだいぶ負担をかけてしまいました。これから、国内での対面での研究集会や、海外からの研究者の招へいなどが徐々に再開していくことと思いますが、コロナ禍が終わったわけではないので、手探りで進めていくしかないのでしょうね。

帰りの飛行機はマルセイユからパリで乗り継ぎだったのですが、突然の熱波のせいかパリは嵐で、マルセイユからの飛行機がなかなか飛び立せず、2時間以上あったはずの乗り継ぎ時間がマイナスになってどうなることかと思いましたが、東京行きの飛行機もやはり飛び立てなかったのどうにか間に合いました。ウクライナ侵攻の影響で、東京ーパリ間だけでも行きは北極経路で15時間半、帰りはシルクロードで13時間の長旅でした。乗り継ぎが間に合わなければ、翌日の総長ミーティングも1年生の演習もなくて済むかと思ったのですが、そう甘くはないようです。

研究ニュース

2022年 春の瑞宝中綬章受章

お礼のご挨拶に変えて 落合 卓四郎



「光陰矢の如し」と申します。東京大学大学院数理科学研究科が設立されて30年、この間の世の中の変化は想像を超えるものがあり、その変化はますます加速しています。この度、身に余る栄誉を賜り、戸惑うばかりですが、数理科学研究科の過去30年間の教育・研究・社会貢献活動等に対して、全学、文科省、国から支持をいただき、研究科への勲章と解釈することにして、4月29日に拝受することになりました。

思えば、私が初代研究科長に選ばれたのも、創設メンバーのうちの最年長者のひとりとして、収まりがよかったからに過ぎなかったためでしょう。にもかかわらず、時弘研究科長から、「来年春以降の叙勲対象者として数理科学研究科から推薦したい」とのご連絡を思いがけずいただきました。軽い気持ちでお受けしましたが、恥ずかしながら後になって叙勲の重みをあらためて知り、大いに恐縮した次第です。数理科学研究科関係の方々にはほかに叙勲資格者はいらっしゃいますが、私が推薦をいただいたのは創設期に6年間研究科長を務めたからだろうと考え自分をなんとか納得させました。時弘研究科長を始め、長い推薦・選考過程で多大なご尽力を賜った多くの関係者に心より感謝申し上げます。お礼のご挨拶の機会をいただきましたので、紙面をお借りして二つ申し上げたいと思います。

一つは、繰り返しになりますが、私個人に対してではなく、研究科に関係する皆さま、研究科の業績の全体に対する受章であり、たまたま私が代表していただいたものであるということです。30年前、数理科学研究科は、当時の本郷キャンパス、駒場キャンパスの数学者達グループの一致団結した努力の結果として創設されました。そのグループの主任経験者達の中で最年長者のひとりとして私が初代研究科長を拝命し、その後、岡本和夫先生、薩摩順吉先生、桂利行先生、大島利雄先生、坪井俊先生、河野俊丈先生、時弘哲治先生が研究科長を務められ、今日まで発展を牽引されてきました。ここで、創設時の研究科パンフレットに記した設立趣旨をあらためて読み返してみます。

(1) 教育を一貫としたものととらえ、あらゆる問題に対してこれまでより柔軟に対応する

(2) 近代の純粋数学と他の学問分野との学際的な研究の急速な発展と社会の数学に対するニーズの増大は、諸現象をモデル化して解析する数理科学までに教育・研究の領域を一步踏み出すことの重要性を示しており、研究者の育成と同時に高度技術専門家を社会に送り出すことを目指す。

(3) 数理科学では研究交流、人事交流が非常に大切であり、数理科学研究科が研究集会や国際会議などの活動の一つの中心的な役割を果たすことを目指し、学内外、国内外に開かれたものとする。

この創設時の思いを具現化すべく、多くの関係者の方々が、心血を注いで来られました。とりわけ、駒場キャンパスで1、2年生全員の数学基礎を教育するシステムがしっかりと機能することを数理科学の全教員が実証したことは、特筆すべき成果であると確信しています。全学も認める実績を積み重ね、創立30年を迎えたことは誠に喜ばしいことです。

そして、申し上げたいことのもう一つは、数理科学研究科の仕事に対する社会的期待がいつそう高まっていることです。かつては、「読み」「書き」「そろばん」が実社会で必要な能力とされてきました。皆さまには釈迦に説法ではありますが、21世紀の社会においてはこれらに「数理科学的素養」が加わります。研究者、技術者はもちろんのこと、例えばビジネス界でも統計やデータを扱うことが広く必須となり、高度専門技術者、さらには文系理系の垣根を超えて知識労働者全般にとって数学は共通言語とさえ言えるまでになっています。ここにおいて、数理科学研究科は、イノベーションを生む血や筋肉をつくる役割を担っていると言っても過言ではありません。

時弘研究科長は、数理科学研究科30周年を迎えるにあたり、設立趣旨の活動が十分に行われてきたかを振り返り、新たな30年に向かって新しい数理科学研究科の目標を策定することが必要ではないかと所信を述べられています(数理NEWS 2021-1号)。さらに、東京大学法人による総額200億円の40年債の発行あたり、学内の学部・研究所等に今後10年間の未来構想の提案が募集され、数理科学研究科でも構想を提案したという報告に期待が高まります(数理NEWS 2020-1)。4月に就任された斎藤毅研究科長の舵取りのもと、新たな30年を刻む有意義かつ困難な事業が始動することになりますが、研究科の皆様の力を結集して成果を挙げられることを祈念しています。

私にとっての受章はいわば花道のように思えますが、同時にこの受章は皆さまへのバトンでもあります。数理科学研究科の一員であることに感謝申し上げるとともに、大いに誇りに思っております。



EAIP Award

ユーラシアン逆問題協会賞 受賞

山本 昌宏

このたび、2020–2022 年 ユーラシアン逆問題協会賞をいただきました。この賞を組織している団体はユーラシアン逆問題協会 (the Eurasian Association on Inverse Problems, 以下、頭文字をとって、EAIP と書きます) で、逆問題の国際的な研究を推進するために専門家によって 2013 年に設立されました。主な活動は国際会議「逆問題：モデリングとシミュレーション」で、会議自体は 2002 年以来 2 年に 1 回開催されてきました。そこで、逆問題に関する研究実績により研究者に EAIP 賞を授与しています。第 1 回は 2014 EAIP 賞でした、その後 2016, 2018 年と回を重ねて授賞してきました。

コロナ禍で開催間隔が変則的になったせいで 2022 年 5 月 22～28 日にマルタ島で開催された会議において、2020-2022 EAIP 賞という名称で 2020 年と 2022 年をあわせて選考した形になっています。過去 3 回の受賞者は、所属機関の所在地によって分類すると、ロシア 3 名、スウェーデン、ドイツ、オーストリア各 1 名で、今回の受賞者はフランス、ドイツ各 1 名と私でした。EAIP は、この賞のほかに若手の奨励賞や学位論文への授賞も組織しており、2 年に 1 回開催される国際会議の開会式のなかで授賞式を行っています。今回の授賞式では、選考委員が私の業績の説明のほかに逆問題のコミュニティでも最も頻繁に旅をしている研究者（多分、そう）というふうに紹介してくれましたが、授賞式はオンラインでの参加でした。

思い起こすと、私が逆問題の研究を始めたのは博士課程の院生時代の 1983 年頃でした。逆問題とは偏微分方程式の係数や考えている領域の形状などがわからないとして、解の余分な情報からそれらを決定する問題を広くさします。直接的にわからない量や形状を、利用できる間接的な情報から決める問題は、実用面からいうと、体内の病変を非侵襲的に探る医学診断、製品内部の傷の形などを検知する非破壊検査、地震波から地球内部の状態を決める問題など多くありますが、これらはすべて逆問題といえることができます。実用上の重要性にも関わらず、数学解析は偏微分方程式の分野でもあまり盛んではありません。最近では研究者人口も増えてはいますが、40 年近く前に私が始めた頃は欧米では数学的な研究はずっと少ない状態で、旧ソ連において研究が比較的進んでいました。1980 年代はソ連からの論文もフルペーパーではない 4 ページ程度の報告がほとんどでした。

そもそも、逆問題は偏微分方程式論の古典的な定式化にのらない問題設定として ill-posed problems と一括してよばれ、一時は「不適切問題」と日本語に訳され研究費の申請や会議の組織でも「不適切な問題を研究する！」ということで、からかわれたこともありましたが（それはそうですね、英語でも、日本語の「不適切」といういかがわしいニュアンスはあります）。今からいうと滑稽な感じですが、日本語訳として善悪のニュアンスを伴わない「非適切問題」を定着させようともしました（そうだったようです）。

その一方で、逆問題自体の応用の可能性と、証明が骨子しか書いていない論文の細部を想像をめぐらして適当に補いながら（見当外れもずいぶんありました）勉強したことは、インターネットでたいていの論文はすぐに手に入る今の時代にあって、特色ある思い出です。数学者が、理論の深化とともに工学、医学などの諸分野と密接に結びついて逆問題の研究を行い、産業界などでも現場で直面している問題を「逆問題」として意識し、その数学的な側面にも大きな興味を持っていたにいたっている逆問題を巡る現状も 40 年前と比べて隔世の感があります。

そのような中で、研究を進展させるために、研究集会などで 1 回限りの出会いしかなかったような研究者同士の結びつきも今よりもいっそう強く、随分刺激されたり刺激したり、お世話になってきたと考えています。長い期間にわたる研究活動を通じて、目に見える・見えないを問わずにご支援を頂いたことが今回の受賞につながり、感謝の念を新たにしております。また私は共著の論文が若いころから数多く、それぞれ、お名前を挙げられませんが共同研究者のすべての皆さまに感謝を贈りたいと思います。

小林俊行教授がフランスで名誉博士号を授与されました

小林俊行先生が、本年6月10日（フランス現地時間）、ランス大学から Doctor Honoris Causa（名誉博士号）を授与されました。この名誉博士号は、学術の顕著な功績に対して贈られるもので、最終的にフランス外務省による認定を経て決定されました。

ランスは、フランク王国のクロヴィス1世が西暦498年にこの地でカトリック教に改宗して洗礼を受けたことから「フランス王家の聖なる都市」と称せられ、19世紀まで歴代の国王の戴冠式が行われた、ヨーロッパ随一の格式を持つノートルダム大聖堂のある街です。ジャンヌ・ダルクの行軍が目指したのもこの大聖堂でシャルル7世の戴冠式を行うためでした。現在、この地方で生産される発泡ワインのみがシャンパンと呼ばれることを許され、お祝い事に使われるのも、ランス大聖堂における戴冠式の伝統に繋がっているそうです。

この歴史豊かな街で行われた小林教授への名誉博士号の授与式は荘厳なもので、テノールの声楽が随所に盛り込まれ、フランスの高等教育・研究・イノベーション省からの代表や、大学の学長・副学長や教授陣に加えて、多くの数学者の出席のもと、新しい数学理論を切り拓いて来られた小林教授の功績がフランス語と英語の同時通訳で丁寧に紹介されました。小林先生のご挨拶の後、聴衆全員が総立ちとなり拍手が鳴りやまず、私は生まれて初めてスタンディングオベーションというものを目の当たりにしました。

今回の朗報の10年前にも印象深い行事がありました。2013年に小林先生の50歳を祝賀する研究集会がフランスで行われ、Kirillov や Helgason など1世代上の伝説的な数学者達から新進気鋭の若手数学者まで多数の参加者が集まる中、Clerc 教授（ロレーヌ大学）は次のように小林先生の数学を形容されました。

「歴史に残る偉大な数学者には全く異なる2つのタイプがある。

●何もないところから、全く新しい分野を作る天才型

●大聖堂を独力で建造してしまうような最高峰の技術をもつ職人型

小林俊行教授は、一人の人間なのに、この両方に100%あてはまっている！」



小林先生は20代前半から、独創的な理論を次々と創始されてきました。名誉博士号の授与式の行われた週と同じ地で、代数・幾何・解析にまたがって小林先生が興された5つの新領域の最近の発展をテーマにした国際会議「幾何学と解析学における対称性」が開催されました。世界中から著名な数学者達が一堂に会し、3年ぶりの対面での研究集会は活気に満ち溢れていました。5日間の国際会議の主題は、具体的には以下の5つの新領域です。

- (1) リーマン幾何学の枠組を超えた不連続群の高次元大域幾何学
- (2) 無限次元表現の分岐則の理論
- (3) 可視的作用の概念による無重複表現の統一理論
- (4) 極小表現をモチーフとする大域解析の理論
- (5) 対称性破れ作用素の解析的理論

小林先生は、新しい幾何学(1)のパイオニアとしての業績でアメリカ数学会フェロー(2017)を授与され、表現論における大きなブレークスルー(2)で日本数学会春季賞(1999)や紫綬褒章(2014)を、複素多様体での業績(3)はフンボルト賞(2008)などで顕彰され、一方、(4)と(5)の新しい大域解析学において、現在、多くの国の数学者を牽引されています。

名誉博士号の授与式では、フランス数学者の視点から、小林理論のスケールの雄大さと先見性についての情熱的な解説があり、同時に、小林先生が多くの優秀な若手数学者を献身的に育てられていることや、新しい概念において記号を導入される際にも完璧主義といえるほど緻密な思考で本質を浮き彫りにされること等も紹介されていました。

(記：関口英子)

Topics

OPEN CAMPUS 2022

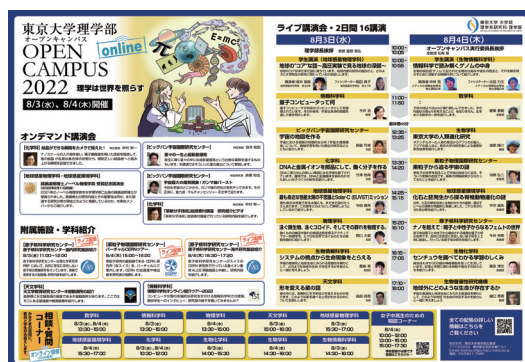
三竹大寿、阿部紀行

8月3日・4日に、理学部オープンキャンパスが行われました。コロナウイルス感染症の影響で、昨年度に引き続き今年度もオンラインでの開催となりました。数学科では、1日目と2日目の両日、相談・質問コーナーを Zoom で開設し、参加者からの質問にジュニアスタッフ3名と教員が回答しました。両日ともに約25名程度の参加があり、主にチャットを通して、多岐にわたる質問が寄せられました。全ては挙げられないですが、例えば「数学科に進学して良かったこと・後悔していること」、「数学科の魅力は何ですか」、「数学科で学んだことはどのように社会に還元されますか」といった率直な質問が多くありました。ジュニアスタッフが各々質問に答える、両日とも活気のある相談・質問コーナーでした。8月4日には、小柴ホールにて理学部の各学科の先生方によるライブ講演会が行われ、その様子が配信されました。数学科からは権業善範先生が「:」というタイトルで話をしました。タイトルは大変短く人目を引くものですが、内容としては射影幾何学を背景とした「比」を題材とするもので、特にデザルグの定理について三次元における三角錐を平面上に射影することを利用したとても美しい証明を分かりやすく説明された講義でした。講演後に質問も多数出ており、参加者はオンラインながらもライブ感を楽しめたのではないかと思います。

ジュニアスタッフとして参加して下さった大学院生の方々と権業先生に、この場を借りて感謝申し上げます。



講義の様子（権業善範先生）



東京大学理学部による
OPEN CAMPUS のポスター

受賞

◆落合卓四郎 東京大学名誉教授が、令和4年春の叙勲にて瑞宝中綬章を受章しました。



瑞宝中綬章・略綬（左）
The Order of the Sacred Treasure, Gold Rays with Neck Ribbon（内閣府 HP より）

◆小林俊行教授が、フランスの Reims 大学で名誉博士号 Doctor Honoris Causa を授与されました。



写真は、授与式の後、お弟子等と一緒に（2022年6月、フランスにて）

◆山本昌宏教授が、ユーラシアン逆問題協会賞を受賞しました。



EAIPは、逆問題の国際的な研究を推進するために2013年に設立されました。協会は、ユーラシア諸国の研究者間の協力を促進するための逆問題の分野への優れた科学的貢献と継続的な努力を表彰するために、「EAIP賞」を設立しました。
(THE EURASIAN ASSOCIATION ON INVERSE PROBLEMS (EAIP) の website より抜粋)



新任紹介・教員

増田 弘毅 教授

2022年4月1日付けで着任した増田弘毅と申します。2004年に東大数理で学位取得してから20年間弱、ずっと九州大学に在籍しておりました。そこでお世話になった多くの方々、また大自然に囲まれた九大伊都キャンパスとの別れはさみしくもありますが、数々の思い出がある駒場へ戻って来られたことを大変うれしく思っています。

専門は統計学です。修士課程中盤でレヴィ過程（連続時間のランダムウォーク）に強い興味を抱き、その統計推測を主軸とした研究を続けて現在に至ります。レヴィ過程は確率過程の基本的なクラスの一つですがその実体はさまざまであり、関連する漸近最適推測においては、概して汎用性とシンプルさが共存しません。これまで事例研究の蓄積から入り、それらを基に理論と実用のバランスを重視した基礎研究を続けてきました。同僚や環境に恵まれ、幸いにもいくつかの発展・展開の一端に携わることができたと思っています。それにともない、現在の研究対象は多様かつ階層的に広がってきました。こうして振り返ってみると、研究態度ならびに研究スタイルの下地となった駒場での院生時代は非常に恵まれた環境にあったと、あらためて痛感している次第です。

依然としてコロナ禍は続いているのですが、状況をもつつ対面での共同研究活動を徐々に復活させているところで。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

大島 芳樹 准教授

4月に着任しました大島芳樹と申します。東大数理には9年前まで大学院生としてお世話になっておりました。中学校も駒場にあってたため、駒場では長く学生時代を過ごしました。この度また駒場に通えることになり、嬉しく思っています。大学院修了後は柏のカプリ IPMU と大阪大学大学院情報科学研究科に所属しました。カプリ IPMU では物理や天文、大阪大学では情報科学の研究者がそばにいる環境で、数学以外の研究の話聞く機会が多々ありました。

専門分野は Lie 群の表現論です。特に簡約 Lie 群の無限次元表現について、D 加群や余随伴軌道とよばれるシンプレクティック多様体との対応を使って調べています。また、最近複雑多様体のモジュライや微分幾何的な多様体の退化にも興味を持っています。

2年前からコロナの影響で外出する機会が減ったためか、体力が落ちてしまったようです。今学期は教室での講義もあり、セミナーや研究会も対面のものが増えてきました。体力を取り戻しながら研究・教育に日々精進したいと思います。至らないことが多いかと思いますがどうぞよろしくお願いいたします。

柳田英二 特任教授

2022年4月1日付けで、数理科学研究科の特任教授を拝命しました。東大数理には1996年から4年間、助教授として所属して以来ですので、22年ぶりの復帰ということになります。学生としても2年ほど駒場に通いましたが、寮がなくなって新しい建物ができたことを除けば雰囲気は以前と変わらず、なんとなくほっとしているところなんです。前任校の東京工業大学では主に放物型偏微分方程式の特異解について研究してきました。新開拓のテーマとあってなかなか進まないうちに定年を迎えてしまいましたが、ここ東大数理において研究を続ける機会を頂き、大変ありがたく感じています。最近は確率論の研究者と共同で、確率過程と偏微分方程式の接点を探っていますが、考え方や用語の違いに苦労しながらも、だいぶスムーズにコミュニケーションがとれるようになってきました。面白い問題が沢山ありそうなのですが、残り少ない時間にどこまで解明できるのかまったく見通しは立ちません。皆様のご協力を得ながら最後の気力を振り絞って頑張りたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

Shane Kelly (シェーン・ケリー) 准教授

2022年4月1日付けで大学院数理科学研究科准教授に着任致しました Shane Kelly です。東京工業大学理学院数学系から異動してまいりました。その前、大学院はほとんどパリで、ポストドクはドイツで行いました。フランス語を話します。ドイツ語は話せません。私の研究トピックの大部分は何らかの形でヴォエヴォドスキー (Voevodsky) のモチーフ理論と関係があります。この理論は、毎年東京大学で開催される「Motives workshop」のおかげでこの皆さんはこの理論をよくご存知だと思いますが、とりあえず何か書いておきましょう。代数多様体のモチーフは、哲学的には、複数のコホモロジー理論 (I 進やド・ラームやクリスタリンなど) に共通する情報を普遍的に捉える対象です。ヴォエヴォドスキーは、ホモトピー理論の手法に基づいてモチーフ理論へのアプローチを開発しました。この方法では、位相空間で使われる単位区間の代わりに、アフィン直線を使って代数多様体のホモトピー同値を定義します。ここ数年はこのような枠組をモジュラー表現論と高次元元類体論の問題に応用する研究を行ってきました。パーシステントホモロジーや楕円曲線暗号にも興味があります。数理には様々な分野の最先端で活躍される優れた研究者が多く、皆様からご教示をいただき自分の研究に生かしていることを楽しみにしております。どうかよろしくお願いいたします。

高田 了 准教授

2022年4月1日付で大学院数理科学研究科に准教授として着任致しました高田了と申します。東北大学大学院理学院数学専攻で博士課程を修了後、ポストドクとして東北大学、京都大学、ドイツの Bonn 大学に滞在しました。その後、助教として東北大学、准教授として九州大学に勤務し、現在に至ります。

研究分野は解析学における偏微分方程式論であり、流体力学に現れる非線形偏微分方程式を専門としています。流体の織り成す様々な流れの様相やそのメカニズムを、偏微分方程式の数学解析の観点から解明することを研究目標としています。特に、大気や海洋など地球流体の運動を記述する方程式を対象として、回転と安定成層が有する分散性と異方性に興味をもって研究しています。

数理科学研究科の一員として、研究および教育に一層精励いたす所存でございますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

山本 修司 特任准教授

4月1日付で特任准教授として着任いたしました、山本修司です。かつて学部から大学院を経てポストドクまで十五年間すごした駒場キャンパスに十年ぶりに戻ってまいりましたが、今回は六か月という短期の在籍となり、「このニュースが発行される頃、私はそこにはいないでしょう」とドラマのようなことを書ける貴重な機会となりました(笑)。

研究分野は代数的数論・解析数論で、特に代数体のゼータ関数やL関数の特殊値の研究、および多重ゼータ値の研究を行っています。前者については、慶應大の坂内健一氏らとともに数年前に発見した「新谷生成類」の研究をさらに発展させるべく、また後者については超幾何関数との関連や様々な方向への一般化・類似といった広がり求めて、試行錯誤しているところで。

東大離任後も、また何かとご縁もあろうかと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



新任紹介・職員

黒沢 健二

教養学部等総務課副課長

(数理科学研究科担当)

4月より副課長として着任いたしました黒沢健二と申します。前職は附属図書館で図書系職員の採用に係る仕事等をしていました。これまで、前職の他、人事部、総務部、各研究科、病院等で、主に人事・総務系の仕事をしてまいりました。おそらく、今回の異動が定年前の最後の異動になると思いますので、気を引き締めて業務に励みたいと思います。職歴は長いのですが駒場キャンパスでの勤務は初めてです。数理科学研究科、また、駒場キャンパスのことを早くおぼえて、少しでも皆様のお役に立てるよう業務に取り組んでいきたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。趣味でテニスをしています。テニスをする方がいましたら、ぜひ、お声掛けください。

小野 咲恵

教養学部等経理課

数理科学経理チーム 一般職員

4月1日付で数理経理チームに配属となった小野咲恵と申します。3月に大学を卒業し、事務職員として東大に新規採用されました。まだまだ至らぬ点ばかりでご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、一日も早く仕事を覚え、教育・研究活動をサポートできるよう努めてまいりますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

小野澤さわ子

教養学部等図書課

情報管理チーム係長

4月1日付で数理図書室に配属になりました。駒場キャンパスは初めてです。しばらく学部生と接する機会が無く、生協周辺の賑やかさにびっくりしています。数理棟周辺はのどかで落ち着きます。係長職も初めて、研究科での勤務も久しぶりで分からないことが多いのですが、先生方や数理事務の皆様にご教授いただきながら一つずつ身に付けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

今西 聡志

教養学部等総務課

数理科学総務チーム 一般職員

4月1日より数理科学総務チームに配属となりました今西と申します。採用1年目ということで右も左も分かっておらず、皆さまに多々ご迷惑をお掛けするかとは存じますが、業務をこなす中で先人の方々から学びを得、日々成長できればと考えております。在学中には文藝創作を学習しておりましたが、日々のメールや通知文の作成業務では毎回文面に頭を悩まされるばかりです。ですが何事も慣れですし、できる業務を着実に増やしお役に立てるよう努めさせていただきますので、宜しくお願い致します。

加藤 麻美子

教養学部等教務課

数理科学教務チーム 主任

4月1日付で数理科学教務チームに着任いたしました加藤と申します。教務の経験は約10年と比較的長いのですが、大学院の教務は今回が初めてとなります。まだ慣れない業務に慌てることも多いですが、デザイン性の優れた数理棟の空間に癒されながら充実した日々を過ごしております。また、現在子育て中のため、急なお休み等で皆さんにご迷惑・ご協力いただくことも多いと思いますが、チームの方々にご教示いただきながら業務に取り組み、先生および学生の皆さんのサポートをしていけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

中川久美子

大学院数理科学研究科

事務補佐員

7月より事務補佐員に採用となりました中川久美子と申します。木々に囲まれ、まるで避暑地のような佇まいの駒場キャンパスで皆様と働かせて頂ける事を大変有難く思っております。

私生活では三人の子育て中です。大学受験を控えた子供がおりますが、大学で学ぶ事を楽しみにしている様子を見るにつけ、数理の学生の皆様が日々存分に学ばれ、そして先生方がご研究に専念なさる事ができますよう、微力ながら努めて参りたいと心新たに致しております。不慣れでご迷惑をおかけしてばかりですが、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

2022年4月1日～8月31日

	異動年月日	氏名	新職名	旧職名等
教員転入	2022.4.1	増田 弘毅	大学院数理科学研究科 教授	九州大学大学院数理学研究院 教授
	2022.4.1	柳田 英二	大学院数理科学研究科 特任教授	東京工業大学理学院 教授
	2022.4.1	大島 芳樹	大学院数理科学研究科 准教授	大阪大学大学院情報科学研究科 准教授
	2022.4.1	KELLY SHANE	大学院数理科学研究科 准教授	東京工業大学理学院 准教授
	2022.4.1	高田 了	大学院数理科学研究科 准教授	九州大学大学院数理学研究院 准教授
	2022.4.1	山本 修司	大学院数理科学研究科 特任准教授	慶應義塾大学理工学部 特任准教授
内部異動 職員転入	2022.6.1	石井 志保子	大学院数理科学研究科 特任教授	東京大学 名誉教授
	2022.4.1	宮本 安人	大学院数理科学研究科 教授	大学院数理科学研究科 准教授
	2022.4.1	黒沢 健二	教養学部等総務課副課長（数理科学研究科担当）	附属図書館総務課総務チーム副課長（庶務担当）
	2022.4.1	小野澤 さわ子	教養学部等図書情報管理チーム係長	法学政治学研究科等雑誌受入チーム主任
	2022.4.1	加藤 麻美子	教養学部等教務課数理科学教務チーム主任	教養学部等教務課国際化推進チーム主任
	2022.4.1	今西 聡志	教養学部等総務課数理科学総務チーム一般職員	（新規採用）
	2022.4.1	小野 咲恵	教養学部等総務課数理科学総務チーム一般職員	（新規採用）
	2022.4.1	吉村 明日香	教養学部等総務課数理科学総務チーム主事員	教養学部等総務課数理科学総務チーム事務補佐員
	2022.4.1	中川 亜紀	大学院数理科学研究科計算情報業務室技術員	大学院数理科学研究科計算情報業務室技術補佐員
	2022.7.1	中川 久美子	大学院数理科学研究科事務補佐員	（新規採用）
	2022.4.1	小山 アキ	教養学部等総務課数理科学総務チーム事務補佐員	教養学部等総務課数理科学総務チーム事務補佐員
	2022.4.1	白石 喜美子	大学院数理科学研究科特任専門職員	大学院数理科学研究科専門職員
	2022.5.31	吉平 保希	退職	大学院数理科学研究科事務補佐員

編集後記

吉田朋広

ウクライナで国際会議がありました。同国はロシアからの侵攻を受け、会議はオンラインでの開催になりました。会議前にはミサイルによる攻撃を受け、キーフの大学も被害を受けたとのこと。旧ソ連出身で現在は西側に移住している旧知は招待講演を辞退しました。これは誠実さからのことで、不条理に対する抗議の気持ちは、彼を含めて参加者皆が共有しています。

コロナパンデミックは全く新しい段階を迎え、英国は本年3月に新型コロナウイルス対策として課していた水際措置を全廃し、フランスも8月にワクチン完全接種証明書や陰性証明書提示義務を撤廃しました。海外では国際研究集会がオンラインで行われるようになりました。いっぽう、日本の規制は厳しく、この夏に海外出張し帰国難民になった話を身近なところから耳にしました。オンラインで出席した国際会議では、我が国の研究が少しガラパゴス化しており、コロナによ

る3年近い国際交流停滞の影響は大きいと感じました。公表されている日本の7月上旬のワクチン接種歴別のデータでは、たとえば未接種と2回接種との10万人あたりの新規陽性者数は年齢層によって逆転しています。また、最近欧州議会において製薬会社が感染予防試験に関する証言をしており、我が国の対策の合理性について考えさせられます。政府は10月に水際措置を緩和しましたが、適用にはワクチン接種3回を条件としているため、無視できない数の研究者が海外出張や来日を躊躇う原因になっていると思われ、日本の研究の今後が懸念されます。ちなみに、コロナと関連させるつもりはありませんが、ウクライナ出身の世界的ピアニストであるエミール・ギレリスは予防接種における事故で亡くなっています。

広報委員長：吉田朋広
数理ニュース編集局：金子道子
校正：中川久美子